

古代の都への道

概要

7 世紀から 8 世紀にかけて、初期の日本政府は、権力の集中化と、遠く離れた地域と首都を繋ぐ大規模なインフラストラクチャーの創設に重点を置いていました。若狭国の場合、海岸から塩や海産物を効率よく運ぶために道路が建設されて保全され、地方行政を扱うため役所が設置されました。特定の寺院や神社もまたこの新たな道路沿いに設立されました。

もっと詳しく知る

道路と駅家

古代の都（最初は現在の奈良県、後に京都）と遠い地方を結ぶのに役立った 6 つの主要な道路の内の 1 つが北陸道でした。若狭は日本海の港へのアクセスを提供した北陸道沿いにある最初の国でした。琵琶湖を越えて北陸道を旅する人々は、分岐して若狭へ行くか、またはそのまま北上して敦賀に向かい、海岸線に沿って現在の新潟県にまで行くことができました。

この道路により、各地方と都の間の効率的な通信ができるようになりました。使者たちは、中央政府からの命令、地方の支配者からの報告、および緊急文書を運びました。公的な用途のための馬が、この道に沿って約 16km ごとに配置された駅家で飼われていました。奈良で発掘された、税と貢納のための木製の荷札には、そのような駅家の名前が 4 つ記されており、一方で、10 世紀の風習や公務の手続きを編纂した延喜式には、3 つの名前が言及されています。

政府の執務所

若狭国は 701 年に、全国を国、郡、里（後に郷）へと分割した新しい行政制度の下で公式的に設立されました。異なる行政区分で業務を管理するために、いくつかの執務所が建設されました。国の執務所は都から派遣された役人によって運営され、郡の執務所は地元の有力な一族から任命された人々によって運営されました。国の執務所の跡地から出土した遺物は、礎石や瓦、そして土器や硬貨、硯などの日用品にまで及びます。

寺院

仏教は 6 世紀にアジア大陸から日本に伝わり、そのすぐ後に仏教寺院の建設が始まりました。若狭に最初の仏教寺院が建てられたのは、7 世紀後半頃です。例えば、興道寺こうどうじの旧跡から出土した瓦の分析から、この頃に創建されたことが分かります。

若狭神宮寺わかまじんぐうじは、神道と仏教が融合して信仰された宗教的な場所として、714 年に創建されました。若狭神宮寺は、奈良の東大寺へ聖なる水を象徴的に送るお水送り（水を送る）の儀式が有名で、10 日後には東大寺で有名なお水取り（水を汲む）の儀式が行われます。若狭神宮寺の発掘調

査で、8 世紀の皇居であった平城宮と一致するスタイルの古代の屋根瓦が発見されたことで、奈良とのつながりがさらに強調されました。

741 年、聖武天皇（701 年～756 年）は、仏教を広めるため、国の安全を祈るために、各国に国分寺（国から支援を受けた寺）を設立するよう命じました。若狭国分寺は、807 年に若狭国でその役目を果たすために建立されました。最初期の建造物は失われましたが、元々の寺院の遺跡は国の史跡に指定されています。

展示品

展示されている遺物や文書は、若狭から昔の都や他の地域に至る道の重要な役割を反映しています。若狭国分寺や興道寺跡などから瓦片が出土しました。陶器、硬貨、鐘などの日常品が、かつての村、宿場、役所の跡地で発見されました。江戸時代（1603 年～1867 年）の延喜式の復刻版は、行政制度における若狭国の地位を論じる部分に公開されており、東大寺の文書には、若狭神宮寺でお水送りが行われた後に行われるお水取りの儀式詳細などが記載されています。